

週刊文春

11月20日号 定価400円

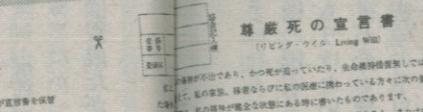
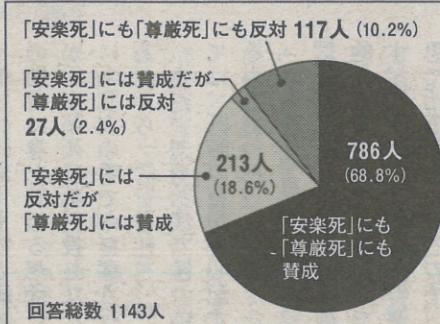


読者
1100人と
考える

オレゴン州29歳女性「安楽死」めぐり議論沸騰

「安楽死」「尊厳死」

あなたならどうする?



「要は自殺や医師による殺人だと思います」(男性42歳)

「苦痛に歪む姿を家族に焼き付けたくない」(女性51歳)

29歳で亡くなったブリタニーさん

「母(享年83)は、悪性リンパ腫と診断され、専門医に抗がん剤治療を強く勧められた。でも、『脱毛して、やせこけるなんてイヤ。きれいなまま死にたい』と言つて、頑なに拒否したのです。結果、老人ホームで緩和ケアを受け、穏やかに死を迎えるました。

母が死ぬ五日前のことで、ふと思いついて、妻と弟の四人で居酒屋に飲みに行つたんです。緩和ケアの先生も『ぜひいってらっしゃい』と言つてくれまし

うなら、世界は美しかった。こうフェイスブックに書けに安楽死を容認する流れが強くなりそうです。(現地ジャーナリスト)

この「安楽死」は、世界的に見ても、オレゴン州生き残し、アメリカ人女性の方された薬を飲んで自ら命を絶つた。

ブリタニー・メイナードさんは末期の脳腫瘍になり、今年四月に余命半年と宣告された。その後、自宅のあるカリフォルニア州から、医師の「自殺援助」による「安楽死」が法的に認められているオレゴン州へ引っ越しした。

安楽死を選択することをウェブ上で公にしたため、生前から全世界の関心を集めている。

「今までオレゴン州などではこうした『安楽死』では亡くなつた方はいましたが、彼女が二十九歳と若かったことや、ユーチューブなどで話題になつたことに、アメリカでも五大ネットワークをはじめ、多くのニュース番組で大きく取り上げられました。全米で

贅否両論の議論を巻き起こしており、州によつて保険制度で、州によつて保

「ブリタニー・メイナードさんの死は、英語の『Death with dignity』を直訳して、『尊厳死』と一部のメディアで報じられました。しかし、これは医師が薬物を使って人工的に死期を早めるという、いわば医師による自殺帮助で、日本では『安楽死』と呼んでいます。

一方、日本での『尊厳死』とは患者の意思により、たとえばがんの終末期などに延命措置を行わない、または中止して自然死を待つことを意味します。自然な経過に任せて最期

本でも大きな話題になつた。自分の死を想定した場合、「苦しむのは嫌だ」「家族に迷惑をかけたくない」など、こみ上げる思いは人によって様々だろう。そこで小誌はメルマガ読者に意見を募り、「死の迎え方」について考えた。

があつたが、最も多かつたのは、①「安楽死」にも「尊厳死」にも賛成」という意見だった。実際に全体の六八・八%を占めた。理由としては、身近な人の死を経験し、「人間らしく生きる」ということについて考えたため、という回

「ポツリと『人間として死にたい』

「数年前に長い闘病の末に亡くなつた祖母は、重度のアルツハイマーで、思い出の場所や大切な人たちの記憶をなくしてしまった。中で逝きました。最後は苦悶の表情で、心苦しく複雑な心境になりました。数年経つた今、家族の意思で延命の命じ続けて、祖母は幸せだったのかと自問自答する日々です。いっそ幸せだった頃の記憶のまま逝けたほうが良かつたのではないかと思つてしまつます」(30・女性)

現在進行形で難病と闘い、切実な思いで死と向き合つていてる方もいる。「医師から、そう遠くない未来に全身が動かず寝たきりになり、失明し、一切の光を失うことを宣告されている。何も見えず、指先すら動かせない未来の自分の

守、革新と文化の違うアメリカですが、これをきつかれています。

一方、日本では「安楽死」は認められていない。現状では終末期に「尊厳死」を選択するか否かが焦点となつていて、尼崎で開業医をしながら、日本尊厳死協会の副理事長を務める長尾和宏医師が二つの違いを解説する。

死ぬ五日前に居酒屋で飲んだ

「待つか待たないかが両者の違いと言えます」

「尊厳死」は、現在日本の多くの病院や施設で行われてはいる。ただ、法律としては明文化はされていないため、日本尊厳死協会や公証役場などで「尊厳死の宣言書」を作つて、あらかじめ自らの意思を明確に表明している人もいる。

では、日本における「尊厳死」とはどのような実態なのかな。たとえば都内に住む丹澤太良さん(66)は母親が亡くなる際に次のような経験をした。

「私は母が尊厳死を選んでよかったですと思つています」高齢化社会が進み、「いかに死を迎えるか」ということが身の回りで切実な問題になつてゐるケースは多く、これからさらに増えることは間違ひない。

そこで小誌はメルマガ会員を対象に、「あなたは『安楽死』や『尊厳死』に賛成ですか? 反対ですか?」というアンケートを実施しました。以下の四つの選択肢から一つを選び、その理由も答えてもらつた。

①「安楽死」にも「尊厳死」にも賛成

②「安楽死」には反対だが「尊厳死」には賛成

③「安楽死」には賛成だが「尊厳死」には反対

④「安楽死」にも「尊厳死」にも反対

姿を考えると、ごく自然に『死』という選択肢が浮かぶ。自分の意思で身体が動かせない状況を受け止めながら生きることをなぜ他人に強要されなければならぬのか。穏やかな表情や精神状態を保てるうちに、大切な人たちに落ち着いて『さようなら』と言える権利が私は欲しい。苦痛に歪む姿を家族に焼き付けたくない」(51・女性)

病気を苦しむ自殺する患者もいるが、それよりは安楽死の方がいいのではない、か、という意見もある。「もう殺してくれ」と懇願していたのに延命され、結局自殺を選んだ祖母のことを思い出さずにはいられない」(36・男性)

また、「個人の意思や権利を尊重すべき」という意見も多く見られた。

「死に関する自己決定権も人権のうち」(63・男性)

「延命措置を行わないといふことは死を受け入れるのと同じだから、自分で自由にその時を決められるところまで選択肢があつてもいいと思う」(25・女性)

一方、自ら死期を早める「安楽死」へは違和感を覚えるという意見が代表的だ。「尊厳死はあくまでも病気の進行に身を委ねるだけだが、安楽死は薬の投与などにより人の手で命を奪う行為だから」(21・女性)

また、「安楽死」については、医師の負担を心配する声もあった。

「私も難病患者ですが、『安楽死』は医師への精神的負担を増やすので反対です。『尊厳死』は患者の意思で治療を停止するので、医師への精神的負担は軽いので賛成します」(44・男性)

少數(三・四%)だが、(42・男性)という根本的な

続いて多かったのは、②「安楽死」には反対だが『尊厳死』には賛成」という回答。一八・六%だった。

こちらは、身近な人が実際に「尊厳死」により安らかな死を迎えたから、という理由が目に付いた。

「二十年前に肝臓がんで亡くなった父は尊厳死に賛同

する医師に出会い、ぎりぎりまで在宅で過ごしました」「余命宣告が当てにならぬい」という声が多い。

「余命宣告以上に長生きする人がたくさんいる。命があるまでは生きるべきだと思う」(35・女性)

「以前は『つらい思いをするくらいなら早く死にたい』と思つていたが、数年前に病で死に掛けたときに『なんとしても生きたい』と考えるようになつた。當時、医師に『延命措置はない』というようなことを言われ絶望したが、奇跡的に回復した」(41・女性)

また、「家族には少しでも長く生きて欲しいから」という願いも多かつた。

「もし自分の家族だったら、残りの人生を精一杯生ききて欲しい。死を選ばないで欲しい」(32・女性)

「私の母が認知症になり、食事も取れない状態になつたときに医師から『延命措置をしてお母さんは喜ぶかな』と言われました。しかし娘としてはどんな状態

意見もあつたが、そもそも『尊厳死』にも賛成」と(64・女性)

「高齢で本人の生きる気力がなく、苦しみたくないという希望があれば、自然な方法で最期を見取りたい。九十二歳の母は胃ろうを拒否して安らかに亡くなりました」(61・女性)

今回、①「安楽死」にも『尊厳死』にも賛成」と(58・女性)

「安楽死」には反対だが『尊厳死』には賛成」の選択肢を合わせると、「尊厳死」に對しては実に八七・四%もの支持が寄せられた。ただ、実際に「尊厳死」を迎えようとしても、うまくいかないことも少なくあるという。前出の長尾医師はこう語る。

「『尊厳死』できるかどうかの鍵は、家族との関わりにある。親孝行の文化のある日本では、自分自身は延命治療を望まないのに、家族に対しても延命治療を望むという人が多い。

もし『尊厳死』を望むのであれば、元気なうちに家族と話し合い、自分の意思を文書に残しておくべきでしょう」

死は全ての人に訪れる。よく考えて、来るべき日をもう意思の疎通のできる状